

# パンフレット (両親指導の手引き書) のすすめ



## ③「明日を信じて－私の子育て奮闘記－」 －発達障害の子どもと向きあって22年－

紹介者 宮崎県小林市立小林小学校  
ことばの教室担当 今川 雅雄

－パンフレットを初めて読まれる方へ－

### ・頼りになる指導書

15年前にことばの教室を初めて担当した際、たよりになったのが先輩の先生方と親の会のパンフレットでした。構音指導の方法から、吃音児の対応、保護者の思い、聴覚障害の理解など、ことばの教室経営に必要なノウハウが全てそろっていました。値段も手頃なため、全冊をそろえて教室に備えました。

「両親指導の手引き書」とあるように、通級生の保護者にも是非読んでいただきたいとお勧めしました。読んでいただくことにより、「ことばの教室での指導内容が理解できた」とか、「子どもの将来に関して明るい展望を持つことができた」などと大変好評でした。

まだ、読んだことがないという方、指導でなやんでいる先生方にお勧めです。

今回はその中で、一番新しくできたパンフレットを紹介します。

### (33)「明日を信じて－私の子育て奮闘記－」

はじめに筆者の紹介をします。名前は安田三和子さんで、教員、会社員等を経て、現在は病院の精神科で臨床心理士をされている方です。

筆者は、出産時にくも膜下出血という二重の苦しみを味わいました。乳児期の初期の大切な時期に子どもとふれあう機会がなかったため、心に負い目を持ってしまいました。

その上、産まれた子どもは、障害があるようです。障害のある子供を持った親は、誰でも一度は考えたことがあるように、筆者も親

子心中を思ったことがあるそうです。

しかし、子どもが成長するにつれて親の負担も軽減していきます。それもつかの間、小学校に上がりますと、学校生活面で様々な支障が出てきます。小学校入学が間近になったある日、子どもの障害名がLDであったと診断を受けました。筆者は、「やっと、私は救われる言葉に出会ったと思いました。」と書いています。

### ・診断を受けることの意味

筆者は診断を受けることの意味をこう述べています。

「診断がつくことで親自身の覚悟が決まるからなのです。」診断名がついたからといって、サポート体制ができるわけではありません。

当時は、LDという言葉も珍しかった時代ですから、現場には支援に理解のある教員はほとんどいなかったのではないかと思います。それだけに、担任との微妙な関係も文中から伺えます。

筆者は、夫のすすめで我が子を山村留学に出すことを決意します。少人数での指導は、様々な面で良い結果をもたらしました。療育が目的ではなかったのですが、筆者曰く「人生の転機になった」というぐらい、良い経験になったようです。

その後、中学での思春期、高校入試および入学、大学入学から大学院の現在にいたるまで、数々のエピソードを交えながら、一人の発達障害がある子どもの成長ぶりを描いています。

### ・特別支援教育にこの一冊

本年度から特別支援教育が本格実施されるわけですが、全ての学校現場で支援体制が確立されているわけではありません。まず、保護者が子どもの特徴を十分認識し、対応の仕方を学校職員とともに考える必要があります。

本パンフレットは、学習支援のアイデアも豊富に載せられており、LD児の支援に悩む親や教師にとって福音の書の一冊になるであろうと確信します。